～ 子供に関わるすべての人へ ～
家庭教育ニュースレター

家族の絆

2024年 秋 ＝ Vol.67 ＝

Contents

● 地震に備えて、親子でできること
● 地域で子育ての支援に携わる
（子育てひろばでのボランティア活動）
● 西宮市立図書館から本の紹介
● ５つのねがいリレーコラム「朝のお楽しみ」
● 公立園の幼保再編について

バックナンバーはこちらからご覧いただけます↑
発行／西宮市教育委員会　問合せ先／地域学校協働課 TEL0798-35-3868

地震に備えて、親子でできること

いつ発生するかわからない自然災害。その中でも「地震」は、最も身近な自然災害の一つです。来年は、阪神・淡路大震災から30年の節目の時期にあたります。今回は、家族全員の命を守るために、日頃から親子で一緒に取り組むことのできる地震対策について、地域防災プランナーとして地域防災活動の支援に取り組んでおられる「室﨑　友輔」さんにお話をお聞きしました。

今年の元旦に発生した能登半島地震では、大きな被害が出ました。また、南海トラフ地震もいつ起きてもおかしくないと言われており、私たちがいつ大きな地震に直面するか予測はできません。だからこそ、普段から家族みんなで地震に備えておくことがとても大切です。特にお子さんがいる家庭では、親子で一緒に備えることで、家族全員の命を守る力を高めることができます。

家庭での地震対策には、「ハード面」と「ソフト面」の両方が必要です。ハード面とは、家具の転倒防止対策や防災グッズの準備など、物理的な対策です。一方、ソフト面は、災害時の家族の連絡方法や集合場所など、家族のルールを話し合って共有しておくことです。

親子で一緒にこうした備えを進めることで、子どもたちも自然と防災意識が高まります。家族みんなの防災力を上げていきましょう。

１．家の中の安全対策

まずは、家の中を安全な場所にしておくことが優先です。地震が起きたときに家具が倒れて怪我をしないように、しっかりと固定しましょう。通路を塞がないような家具の配置にも気をつけてください。家具が倒れて子どもが部屋に閉じ込められたという事例も報告されています。親子で一緒に家具の安全対策をすることで、子どもたちも家の中の安全な場所や危険な場所を理解し、地震の際にどうやって自分を守るか学ぶことができます。

２．防災グッズの準備

地震が発生すると、電気や水道、ガスといったライフラインが止まるかもしれません。そこで、ライトや水、非常食、簡易トイレなどの防災グッズを準備しておくことが必要です。これも親子で一緒に行うことで、子どもたちも災害後の生活に興味を持つでしょう。例えば、アレルギー対応の食品や眼鏡、学用品など、家族それぞれのニーズに合わせて必要なものを考える良い機会になります。

３．災害時の連絡方法

地震が起きたとき、家族全員が一緒にいるとは限りません。そんな時にまず気になるのは、家族の安否ですよね。災害用伝言ダイヤルやLINEなど、災害時に使える連絡手段をいくつか準備しておくと安心です。さらに、離ればなれになった場合の集合場所についても、家族で話し合って決めておきましょう。

４．防災訓練への参加

地域で行われる防災訓練にも、ぜひ親子で参加しましょう。訓練では、避難経路の確認や地域の防災ルールを学ぶことができ、さらに地域の人たちとのつながりも深められます。こうしたつながりが、災害時には助け合う力となり、いざという時にとても役立ちます。

５．防災を日常生活に取り入れる

防災は特別なことではなく、日常の中に自然に取り入れることが大切です。たとえば、食品や日用品を少し多めにストックしておくことや、ご近所と普段から仲良くしておくことも防災の一環です。

また、キャンプなどのアウトドア活動も、災害時に役立つスキルを身につける良いチャンスです。親子で楽しく防災に取り組むことで、自然と備えができ、大切な家族を守る力が養われます。

防災は肩ひじを張らず、日常生活の中で少しずつ取り入れていくことがポイントです。日常生活の中で防災の知識を実践し、自然に身につくような環境をつくっていきましょう。

室崎（むろさき）　友輔（ゆうすけ）
地域防災プランナー／防災士
神戸常盤大学専任講師

1980 年 9 月 1 日（防災の日）生まれ。2008 年大阪大学大学院を中退後、ボランティア参加をきっかけに NPO 法人プラス･アーツに入社。楽しく学ぶ防災訓練『イザ！カエルキャラバン！』など、防災を楽しく伝える活動に従事。2019 年に独立、地域防災プランナーとして地域防災活動の支援に取り組む。2022 年より神戸常盤大学専任講師、地域防災や防災教育を専門として教育・研究に携わる。

地域で子育ての支援に携わる
(子育てひろばでのボランティア活動)

「子育ての孤立化」の原因は、地域の人間関係の希薄化や、父親の育児参加不足、子育て支援サービス情報の周知不足など多岐にわたります。 一方で、厚生労働省では「地域子育て支援拠点事業」を展開していることから、今回は「地域で子育てに取り組むこと」の意義や利点について、「甲南女子大学人間科学部　教授　伊藤　篤」さんにお話をお聞きしました。

本ニュースレターのテーマは「地域で子育てに取り組むということ」と聞いています。そこで、地域における子育て支援の典型とも言える「子育てひろば」を取り上げ、そこで地域の方々が担っているボランティア活動に関する雑感・所感を書いてみたいと思います。

私は、2005年９月に発足した神戸大学大学院総合人間科学研究科〔現　人間発達環境学研究科〕附属のサテライト施設「のびやかスペース　あーち（以下、「あーち」と略します）」を約14年間にわたって運営したのちに、現在の勤務先である甲南女子大学に移りました。

この施設は、いわゆる「子育てひろば」としてスタートしています〔２年後には“地域子育て支援拠点”として国事業の補助金対象施設となり、現在に至ります〕が、開設当初より「子育て支援を核とした共生のコミュニティ形成の拠点」になることを目指していました。したがって、「あーち」を利用したい・「あーち」にかかわりたい人ならば、乳幼児から高齢者まで、障害のあるなし・性別・国籍・門地にかかわらず受け入れ、互いに排除することのない関係が形成されることを何よりも大切にしていました。

このような「地域に開かれた共生の場を創る」という理念が地域の人々や子育てひろばの利用者の皆さんから受け入れられたのだと思いますが、開設当初から、多様な人たちが「あーち」にボランティアとしてかかわってくれました。

まずは、地域に在住する中高年世代の人々がプログラム・リーダーとして、「あーち」の利用者である子どもや保護者向けに、絵本も含めたお話しの会、指人形なども含めた簡易な演劇会、リトミック教室・造形教室・書道教室などをボランティア活動として主体的に担ってくれました。これは、私ども運営者側にとっては、大きな喜びであると共に、この施設が発展していく確固たる原動力にもなりました。今でも「あーち」には、この流れが連綿と続いており、例えば、高齢者が中心となって提供する「おもちゃ病院」というプログラムは大きな人気を博しています。

次に、この施設が提供する支援の質を新たなステージ・高みに押し上げてくれたのは、利用者であった（ついこの間までは支援を受ける側であった）母親たちです。彼女らは、自らボランティアとして、子育てひろばの利用者である子どもや保護者の力になりたいと、自分たちのできること・得意なことを生かした活動を展開したいと申し出てくれたのです。ある人はスリング交流会を、別の人は食育ママセミナーを主宰してくれました。また、毎月のスケジュールを掲載する「あーち通信」に長期にわたってエッセイを寄稿し続けてくれた人々、子育てに役立つ情報を求めて取材に出かけて記事づくりを担ってくれた母親のグループなどもいました。なお、「あーち」において、利用者が支援者となったケースのうちで最長〔不倒〕のかかわりは「ベビーマッサージ」ですが、なんと17年間途切れることなく現在まで続いています。

さらに若い世代も、数は少ないですが「あーち」にボランティアとしてかかわってくれました。2007年度から「あーち」では、小・中・高校生が乳幼児と交流する「赤ちゃんふれあい体験学

習」を月1回（毎年5月〜12月）開催し始めましたが、これに参加した近隣の女子中学生が、その後、高校を卒業する時期まで〔大学に入っても数回は訪ねてきてくれています〕、このふれあい体験学習のスタッフとしてお手伝いをしたり、不定期にひろばに遊びに来る親子と交流したりしてくれました。こうした経験が影響していると思うのですが、彼女は幼児教育学を専攻できる大学・学部に進みました。

ここまで、中高年世代、子育て世代、若者世代がそれぞれに、子育てひろばという親子の居場所において、自分の得意なことやしてみたいことをボランティア活動として積極的・主体的に展開している姿を描いてきました。誰もが「生きがい」「やりがい」を感じてこうした活動を継続してくれたと思いますが、彼らに共通するのは、おそらくですが“自己成長”の実感なのではないでしょうか。

子育てひろばの利用者である親子を楽しませる、親子に何かを教える、親子を支えることが、ボランティアの人々の「生きがい」「やりがい」をもたらすことは間違いないでしょうが、それだけでは善意の一方通行に過ぎません。活動を通して自分も確かに成長しているという感覚――利用者が存在していることで自分もメリットを受けているという感覚――が、活動を継続できる源になっていると思われます。

以上から、多様な世代の人々が子育てひろばにかかわってくれることで、子育てひろばの利用者である親子が様々な経験や学びの機会を受け取る一方で、支援を受ける側である親子が子育てひろばにいてくれることが、かかわる側（支援する側）である多様な世代の成長をもたらしているという結論を導き出すことができます。子育てひろばには、同じ地域で暮らす者どうしの「相互依存関係」が生まれ・育まれる大きな可能性を秘めていると考えています。

伊藤（いとう）　篤（あつし）

甲南女子大学・教授／神戸大学名誉教授／博士（学術）

1957年名古屋市生まれ。
1988年3月、名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。
日本福祉大学社会福祉学部（専任講師・助教授）を経て、1996年4月、神戸大学発達科学部・助教授。
2006年3月、神戸大学総合人間科学研究科［現 人間発達環境学研究科］教授を経て、現在、甲南女子大学人間科学部・教授。
神戸大学に在職中、附属幼稚園長・小学校長を併任［通算5年］。
2021年3月、西宮市教員委員会より教育功労者の表彰を受ける。

西宮市立図書館から本の紹介

●家族でそなえる防災・被災ハンドブック

天野　勢津子／作・絵　イースト・プレス

地震など災害が多い国に住む私たちにとって、日頃から家族や地域全体で防災について考えておくことは大切です。

もしもの時に役立つ防災の知識や知恵を、イラストやマンガを使ってわかりやすく解説したこの本。おうちキャンプ感覚で無理せずできる日常防災や、防災ピクニックで楽しみつつ被災生活の不自由を減らすアイデア発見など、子供と一緒に今すぐできる防災対策を始めてみませんか。

●「ふつう」の子育てがしんどい　ー「子育て」を「孤育て」にしない社会へー

石田　光規／編著　晃洋書房

孤立した状況での育児や孤独感を表す造語として「孤育て」があります。自力でがんばることが「ふつう」とされる子育ては、過酷なサバイバルゲームのようです。そんな孤立・孤独からの抜け出し方のほか、心の負担を軽減する支援や人とのつながり方が紹介されています。「地域の中に居場所をつくることが、寄り添う存在に気付くきっかけになる」。地域で取り組む子育てについて書かれた1冊です。

図書館では、このほかにもテーマに沿った絵本や、わかりやすく書かれた本がたくさんあります。ぜひ図書館へお越しください。

思いやりのある西宮っ子を育てる

5つのねがい リレーコラム

西宮市家庭教育振興市民会議が提唱した家庭教育の「５つの実践目標」を「５つのねがい」に改め、これをテーマとして、家庭教育関係者などに自身の体験や思いを投稿していただくリレーコラム。

今号は「見守ろう　よその子　我が子　区別なく」をテーマに、「西宮市立浜脇中学校　校長　佐々木　理」さんにお話しいただきました。

「５つのねがい」

- 育てよう　優しい心と　がんばる力
- 声かけよう　おはよう　ありがとう　ごめんなさい
- 見守ろう　よその子　我が子　区別なく
- 習慣づけよう　早寝　早起き　朝ごはん
- 外に出よう　元気に遊んで　友だちいっぱい

朝のお楽しみ

「なんで毎朝あいさつするん？」ある朝、浜脇中学校前を通って小学校に登校する児童の一人が私にたずねました。本校北側と東側の道路は、どなたとでもあいさつが交わせる「あいさつロード」となっています。私がその児童に「あいさつは、毎日するものです」と笑顔で答えると、「ふ～ん」と言って通り過ぎていきました。

それからは、私の前をわざと隠れて通ろうとしたり、私が振り返るのを「だるまさんが転んだ」のように遊びに使ったりと、毎日楽しませてくれました。最近ではそれに飽きたのか、笑顔で「行ってきます」と返してくれることが多くなっています。最初は照れくさそうに通り過ぎていた児童が、いつの間にか自分からあいさつするようになっていたり、学年が変わると弟を連れて一緒にあいさつをしてくれたりする児童も増えてきました。

そうこうしているうちに、本校に入学してきた生徒もいます。「もう、『行ってらっしゃい』じゃなくなったね。」私がかけた言葉です。中には、少し前までニッコリ笑って手を振ってくれていたのに、気がつくと照れくさそうに過ぎていくようになった児童もいます。「成長してるやん。」微笑ましく見送っています。

もちろん、何の反応もなく通り過ぎていく児童もいます。少し寂しい気もしますが、「あなたを見守っている人がここにいるよ」というメッセージを送ることが大切である、という話を聞いたことがあり、私の声がそんな風に届いていれば良いなぁ…と思っています。

そうそう、忘れてはならないのは、正門であいさつをする元々の目的は、浜脇中学校の生徒たちを笑顔で迎えることでした。このお話は、私にとっての「楽しいスピンオフ」っていうところでしょうか。

佐々木（ささき）　理（さとし）

西宮市立浜脇中学校　校長

公立園の幼保再編について

本市では、平成18年をピークに小学校就学前の子どもの数が減少し続けており、公立幼稚園と公立保育所について、少子化を見据えた対策が迫られています。

また、厳しい財政状況の下、公立園が地域における幼児教育・保育を支える役割を今後も果たしていくためには、人材・財源をより効率的・効果的に活用する必要があります。

そこで、本市では、現在の公立幼稚園と公立保育所を統合するなど再編し、これによって生み出された人材・財源を子育て支援のさらなる充実に活用していくため、「西宮市幼児教育・保育のあり方」及び「アクションプラン[part1]［part2]」を策定・公表しています。

その中では、公立幼稚園と公立保育所を概ね10年間かけて再編し、ブロックごとに公立認定こども園を設置していくなどの取組内容についてお示ししています。また、「アクションプラン[part3]」について、令和６年度中の公表を予定しています。公立園の幼保再編について、保護者や地域の皆さまのご理解をよろしくお願いします。（学事課）